

〔八丈島特産園芸作物における生産振興技術対策〕  
新規導入を目指したレイ・プランツの生育特性の把握と施設栽培技術  
～オキナワウラボシの収穫間隔および収穫方法～

中田亜由美・菊池知古  
(島しょセ八丈)

---

【要 約】 オキナワウラボシは1～3ヶ月のいずれの収穫間隔でも年間の収量は同程度である。1ヵ月に一度、収穫可能葉を全て収穫する方法は、1/2 収穫した場合よりもサイズ、羽片数は減少するが、可販葉数が多く、管理上の手間も省ける。

---

【目 的】

オキナワウラボシ (*Microsorium scolopendria* Copel.) は世界の熱帯・亜熱帯地域に広く分布する、ウラボシ科に属する常緑性シダである。八丈島・青ヶ島ではティーリーフ、イシカグマに次ぐレイ・プランツの品目として期待されている(羽片をちぎり、編みこんで使用)。そこで本試験では、定植2年目の株における収穫間隔、収穫方法の違いが収量、葉のサイズ、片側の羽片数に及ぼす影響を明らかにし、生産および出荷の際の基礎的知見とする。

【方 法】

2012年3月に、葉を1枚つけて20cmの長さに調整した地下茎を無加温ビニルハウスに株間25cm、条間30cmで定植した。草勢維持と収穫葉サイズの大型化を目的とし、収穫間隔1、2、3ヵ月の試験区を設けた(以後1、2、3ヵ月区とする)。また、各区に展開した葉を全て収穫する全収穫区と、1/2に当たる枚数を収穫する1/2区を設けた。各区30株、2反復で行った。施肥量はIB化成を2ヵ月ごとに5kg/10a施用した。2012年10月から試験区毎の処理を開始し、12ヵ月間調査した。葉身が出荷規格に該当するものについて、収穫枚数、出荷の可否、サイズ別割合、片側の羽片の枚数を調査した。

【成果の概要】

1. 年間の収穫枚数は収穫間隔の違いによらず、全収穫区が1910～2050枚、1/2収穫区では全収穫の6～7割にあたる1183～1367枚であった。収穫物の品質を見ると全収穫区よりも1/2区が、また収穫間隔が広がるほど出荷不可割合が増加した(図1)。
2. 収穫葉のサイズ別割合を見ると、全試験区ともS～Mサイズが多かった。同じ収穫間隔では全収穫区よりも1/2区で大きなサイズの割合が増える傾向にあった(図2)。
3. 各サイズ内の片側羽片数はいずれの収穫間隔、収穫方法とも2S～Mは3～4枚、Lは4～5枚が多かった。3ヵ月区のL以上は、1、2ヵ月区より片側羽片数5枚以上の割合が高くなった。
4. まとめ:オキナワウラボシの全収穫は1/2収穫に比べ1.4～1.7倍の収量が得られるが、異なる収穫間隔では同程度となった。一方、全収穫は1/2収穫より収穫葉のサイズが小さく、羽片数が少なくなる傾向にあった。1ヵ月に1度、収穫可能葉を全て収穫する方法は収量やサイズ等の品質が安定し、管理上の手間を省ける。
5. 留意点:用途がレイの場合、現行規格で出荷不可となる2S～Mに含まれる片側羽片2枚以下の葉も出荷可能となるような規格の検討が必要である。

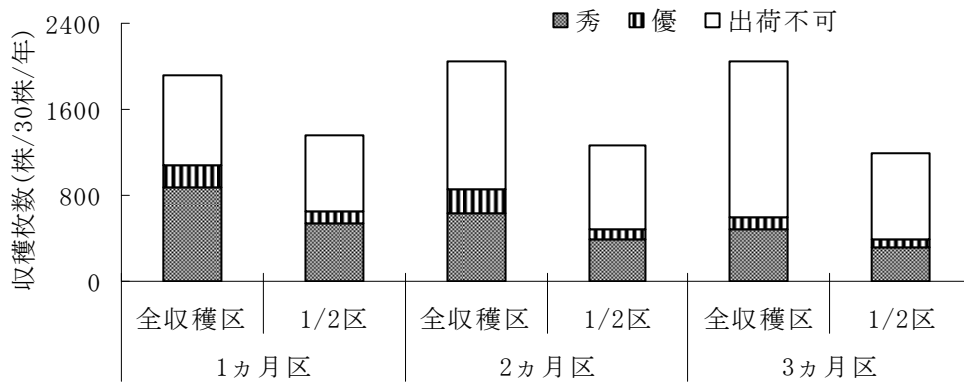


図1 オキナワウラボシの異なる収穫間隔と収穫方法が収穫枚数および品質に及ぼす影響

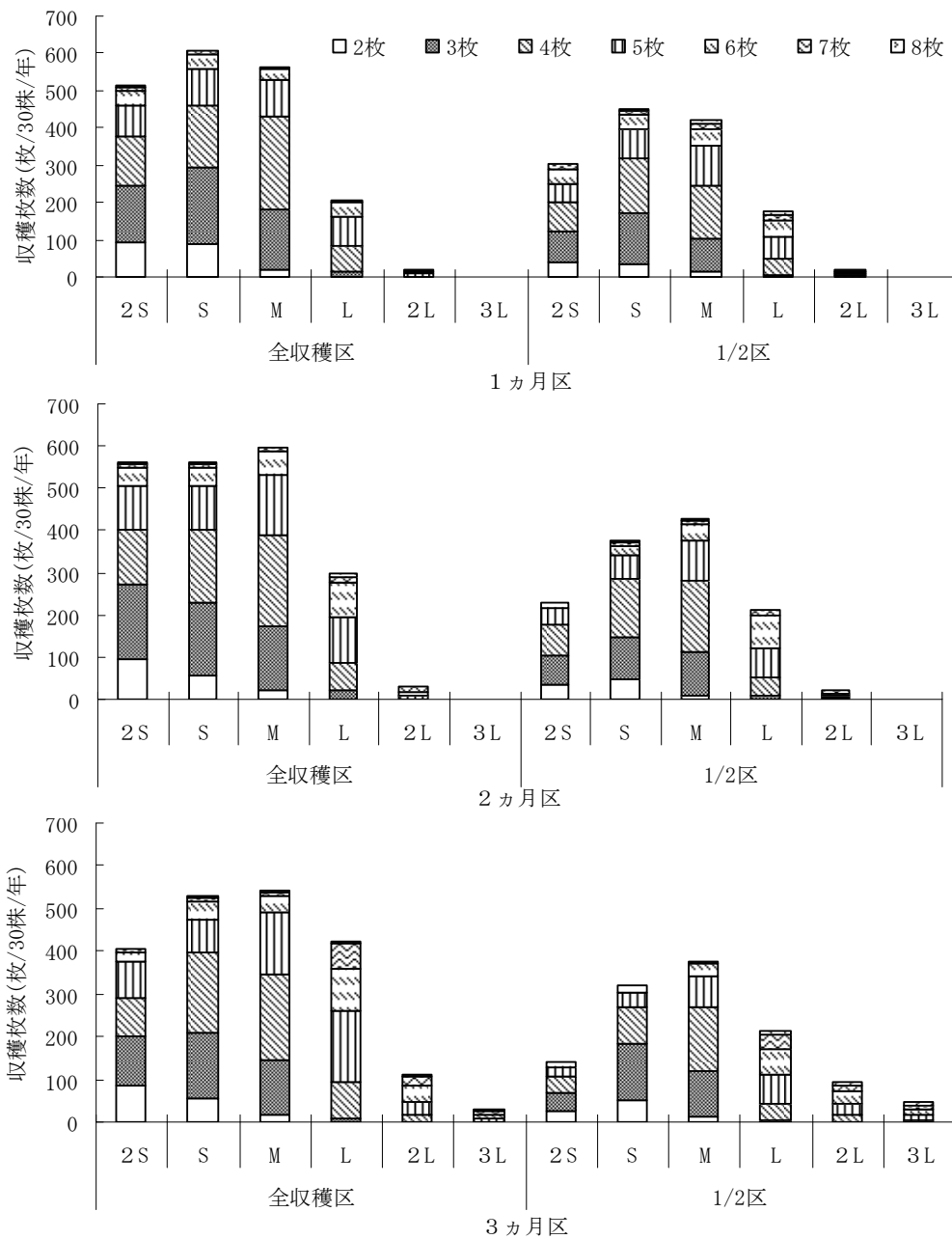


図2 オキナワウラボシの異なる収穫間隔と収穫方法がサイズ別収量および片側羽片数に及ぼす影響

注) 規格は葉身長で区分した。3L : 40~45cm, 2L : 35~40cm, L : 30~35cm, M : 25~30cm, S : 20~25cm, 2S : 15~20cm, 規格外 : 15cm 未満)